

伝文

日本口承文芸学会会報
第7号 1990年9月

発行 日本口承文芸学会
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所内川田研究室気付
電話 03-917-6111 内線 384
(水曜日午前10時～午後5時まで)

〈学会への提言〉

ことばの伝承

大島建彦

たまたま高知県の坂本正夫氏から、同県内のかなりひろい範囲に、ヤマトコトバやジコトバなどと称する、独特のあやことばが伝えられていたと教えられた。渡邊昭五氏の『歌垣の研究』などには、長岡郡大豊町の柴折薬師で、旧7月6日のお籠りの掛合に、「はんごうこうで参りましょうか、ひらことばで参りましょうか、百人一首で参りましょうか、やまとことばで参りましょうか」などと唱えられており、いくとおりもの口上のことばがおこなわれていたと記されている。坂本氏のご調査によると、ただ男女間の掛合だけにとどまらず、高岡郡の越知町や仁淀村などでは、若者の飲食の集りなどにも、しばしばベンクラベなどといって、そのようなあやことばをきそいあうしきたりがあったという。たとえば、「山の木の数草の数、八反畑のきしの数、千里ヶ浜の砂の数、三歳馬のひげの数」などというのが、この地方のヤマトコトバとして伝えられており、よその地方の歌

の文句とも通ずるものと認められる。拙著の『ことばの民俗』にもふれておいたが、和歌山県の熊野地方の山間部にも、同じようなヤマトコトバの伝承が知られており、坂本氏のくわしい報告がまとめられることによって、新しい研究の気運もおこってくるものと期待される。

この学会の名称にもとられた「口承文藝」という術語は、しだいにひろい分野の研究者の間にも受けいれられてきたが、もともとその本来の用法からいうと、やはり口から耳へと伝えられる民俗をさしており、そのまま「口頭伝承」や「言語伝承」にあたるものであったことを忘れてはならないであろう。実際には、説話と歌謡との二つの部面で、すぐれた研究の実績が示されてきたが、ひろく民間の生活を通じて、それらの両者の伝承をも含めた、さまざまなことばの実態をさぐるものが求められるのではなかろうか。

(東京都 新宿区)

平成2年度日本口承文芸学会大会報告

平成2年度の大会は6月2日(土)・3日(日)の2日間にわたり、愛媛県松山市の愛媛大学教養部大講義室を会場にして開催された。大会参加者は地元研究者を含めて約120名。

初日には、森正史氏(愛媛民俗学会)の「伊子の伝説の地域性」と小島美子氏(国立歴史民俗博物館)の「文化の中の音の世界」の2つの講演をうかがったあと、3人の研究発表があり、会員総

会に移った。

会員総会では、平成元年度の事業・会計・機関誌13号の件などの報告事項が承認され、つづいて平成2年度の事業計画・予算案・機関誌14号の計画などが審議され承認された。また、平成3年度大会が筑波大学で開催されること、口承文芸大辞典の件(詳細は後述)、本会を日本学術会議に再登録する件等について話しあわれた。総会終了後、

愛媛大学職員会館において懇親会がもたれ、地元主催者のご配慮により、全国各地からの出席者60名が楽しい歓談のひと時を過ごした。

2日めには研究発表会とシンポジウムが行なわれたが、初日と2日めの研究発表者と題目は次のとおり。黒木幹夫氏(現代のコスモロジー)、加藤千代氏(中国の「都市新伝説」)、萩中美枝氏(アイヌの口承文芸の変容——知里幸恵の場合——)、久万田晋氏(奄美大島八月踊りのナラベにおける歌詞選択)、吉川周平氏(神楽と神がかり——大元神楽をめぐって)、藤山正二郎氏(人柱伝説の生成とコスモロジー)、間宮史子氏(ドイツ語圏の異類婚姻譚——人間と動物の関係を中心に)、常光

徹氏(人面獣の予言)、白石昭臣氏(稲作の伝承)。

シンポジウムは2日めの研究発表会のあと、川田順造氏の司会により「文字と語り——口承文芸の直面する諸問題」と題する統一テーマをめぐって行なわれ、まず川田氏の問題提起につづいて、兵藤裕己氏の「ヨミの語り芸」ということ、飯豊道男氏の「グリムとオーストリアの昔話」、恒松多美子氏の「昔話を語る」、秋田忠俊氏の「南予のトッポ話」の発表があり、討論に入った。

大会の翌日(6月4日)には、有志参加のもと、四国遍路の元祖といわれる衛門三郎ゆかりの地をめぐる見学会が行なわれた。

第2回研究例会

1989年度第2回研究例会は、90年3月17日に中央大学駿河台記念館にて開催された。第1報告者の鈴木満氏は、『小クラウスと大クラウス』から民話『馬喰八十八』まで」と題し、佐々木喜善の『聴耳草紙』に採録されている「馬喰八十八」は、和歌山県那賀郡の民話「大むく助と小むく助」などと同様、尾崎紅葉がアンデルセン童話の「小クラウスと大クラウス」を翻案した「二人椋助」に基づいており、これを東北地方の優れた語り手が昔話化して地元で定着させたものであろうと結論づけられた。同時に「俵葉師」にも言及され、これは「二人椋助」とは関係がなさそうだと述べられた。

第2報告者は松原孝俊氏で『手無し娘』のふるさとは?——グリム童話と朝鮮半島——』について発表された。これは論文として『口承文芸研究』第14号に掲載予定。

『口承文芸大辞典』の編集について

1990年度日本口承文芸学会大会第14回総会の席上、かねてから継続審議中の『口承文芸大辞典』について、特別委員会委員長長野村純一氏から以下の報告ならびに審議が求められ、了承された。

同朋舎出版を版元として、日本口承文芸学会編として刊行。3年以内を目途とする。体裁はB5

判上製ケース入り。約1500ページ。予価2万5000円、初版部数4000部とする。執筆料は四百字詰原稿用紙1枚2500円とし、約7500枚を予定。なお、刊行時、学会には印税50万円前後が提供される予定。項目選定準備として基礎カード10万枚を作成し、これには若干のアルバイト料を支給する。

編集にあたっては、近隣諸国の情報をできるかぎり収録し、現地学者への執筆依頼も考慮する。執筆は原則として会員を基本に行なうこと等、実務に伴う提案がなされてすべて承認された。

なお、編集委員の一部に交替があり、本田安次氏の後任に三隅治雄氏が就任され、幹事として7、8名の方が指名された。

第7回理事選挙予定

現理事の任期は今年度末までなので、今年度中には次期理事を決める第7回理事選挙が行なわれる。

選挙管理委員会は秋に発足予定であるが、従来の例によると平成3年2月ごろに選挙が行なわれることになる。選挙権は平成2年度の会費納入者のみにしか与えられないので会費未納の方は速にお納めいただきたい。

〈仲間たち〉

比較民話研究会

丸 山 顯 徳

1983(昭和58)年12月11日、比較民話研究会は奈良において11名の会員で発足した。会の活動内容は次の4点である。「I. 私達は、世界の諸地域の民話を、さまざまな学問領域から学際的に研究している仲間のグループです。II. 私達は、誰もが対等な立場で、手弁当で活動するグループです。III. 私達は、現代日本における口承文芸の実体を把握し、世界的な視野で比較研究し、特に東アジアにおける日本の昔話の位置を明らかにすることを目的としています。IV. 私達は、フィールド研究と比較研究を、活動の二本柱にしています。」現在までの主な活動は次の通り。①フィールド研究としては、奈良県吉野郡大塔村(『大塔村の昔話』昔話研究懇話会編『昔話—研究と資料』第14・15号)、同東吉野村(『東吉野の民話』国土社刊行予定)、同吉野町国栖(近刊予定)、橿原市旧耳成村の調査中(橿原市教委から刊行予定)。②比較研究としては、民話の方法論の研究の後、現在「龍説話の国際比較」として、現在までのところ、ノルウェー、ドイツ、フランス、イングランド、スコットランド、バスク、古代セム語地域、中国(漢民族)、韓国(古代)、日本(今昔物語)などを取り扱っている。

会員は、関西在住のものを中心に、岡山から愛知まで、大学・高校の教員、指導主事、研究員、学芸員、大学院生、学生、卒業生、会社員、主婦など登録メンバーは現在31名。会員からみた本会の特色は、異なった大学の出身、異なった専攻、異なった方法論、異なった言語を学んだ者が集まって共同研究しているグループであることである。

日常活動として、ほぼ一カ月に一度の民話の比較研究例会と、春、夏、冬の休暇を利用したフィールドがある。研究会には、女性の方も多く、従って、子供の託児が問題であるが、女性の研究が円滑に行くよう子供同伴で研究会を行っている。しかし、いまのところ問題はない。また、皆が長く研究出来るよう、経済的負担を軽くすることに心掛けている。

(連絡先 〒634 橿原市新口町63-23 丸山顯徳)

〈こ え〉

人生のゆくえ—天道念仏の場合—

鈴 木 正 崇

春先の3月頃、千葉県の下総一帯では天道念仏が一せいに行なわれる。ムラごとに地元の人々が寺堂に集まって祭壇を作り、それにボンデンという白や色紙の幣束を挿して山や塚に見立て、中央に大日や出羽三山を祀って念仏を唱え、時にはその周囲を踊り回る。死者供養、亡者回向、極楽往生だけでなく現世での五穀豊饒を願ってオテナウ様も祀る念仏である。この行事を通じて印象付けられることは、担い手の経験や性別が微妙に声として発する念仏の持つ力に影響を与えているのではないかということである。男女それぞれ60歳以上の老年層が念仏講を組んで行事を主宰するのだが、人間の老成というものが念仏の持つ呪力を高め、現世・他界双方に強く働き掛けると信じられている。当然のことかもしれないが、若者の唱える念仏は効果が薄いとされる。更に男女の役割分担が明確で、男が六座念仏という経文を主体に唱え文字の伝承を受け継ぐのに対し、女は和讃が主体でうたう念仏たる融通念仏やハッセという寿ぎの唱句も加わり次第に踊りへと展開する。言わば儀礼的部分は男が担い、祝祭性を持ち世俗に開かれた場面では女性の関与が大きかった。この違いは、男女の人生の生き方を反映しているのではないか。一般に男は奥州参りと称して出羽三山登拝を果たした者が講を主宰し、これは一生に一度行なうもので、老人になる為のイニシエーションの役割が課せられていた。女人禁制の聖地、そして死霊がいると観念される山に赴き、他界を遍歴する。擬死再生により死を超絶し神に近い存在になった男達、これに対し女達は子安講から念仏講へと連続的段階を経て年齢に応じて人生の様々な生き方を体験し、自然のうちに死に近づき仏に近い存在になる。神と仏、生と死が交錯し合う念仏を唱える時、男が外部との関連を保ち導き手の様相を持つのに対し、女が内部の精神秩序を維持する傾向を指向するのは、人生への意味付けの違いによるのかもしれない。(東京都台東区)

新刊リスト

- 巖谷小波と昔話「浦島太郎」の成立（北海道大学 言語文化部紀要） 高橋宣勝 85.（寄贈）
民間説話 福田晃編 世界思想社 89.3
日本神話の特色 吉田敦彦 青土社 89.3
特集・うわさの本（別冊宝島94） JICC 出版局 89.4
山形の民話（113号，江口文四郎記念号） 山形民話の会 89.5
山の怪奇・百物語（シリーズ山と民俗6） 山村民俗の会 89.5
おとぎ話にみる家族の深層 ヴェレーナ・カースト，山中康裕監訳 創文社 89.5
民具マンスリー（第22巻5～12号，第23巻1～3号） 神奈川大学日本常民文化研究所 89.8～90・6（寄贈）
沖縄国際大学文学部紀要（国文学編） 沖縄国際大学 89.12
特集・現代のむかしばなし（月刊言語18-12） 89.12
グリム童話の黒い少女と勇敢な少年 ルーマ・ポティックハイマー，鈴木晶他訳 紀伊国屋書店 90.1
日本の神話 吉田敦彦 青土社 90.1
アメリカ・インディアン神話 バーランド，松田幸雄訳 青土社 90.1
民話の手帖（42・43号） 日本民話の会 90.2，90.5（寄贈）
サガのころろ ステブリン・カメンスキイ，菅原邦城訳 平凡社 90.2
甲南国文（37号） 甲南女子大学国文学会 90.3（寄贈）
国立歴史民俗博物館研究報告（25～28集） 国立歴史民俗博物館 90.3（寄贈）
同志社国文学（33号） 90.3（寄贈）
昔のしばたの暮らし叢書・第2集（抜刷） 佐久間惇一・ふるさと伝承会編 90.（寄贈）
国際日本文学研究集会会議録（第13回） 国文学研究資料館 90.3（寄贈）
調布の動物ばなし 調布市郷土博物館 90.3
狸とその世界 中村禎里 朝日新聞社（朝日選書） 90.4
箱館昔話 久保孝夫 90.4（寄贈）
センダックの絵本論 モリス・センダック，脇明子他訳 岩波書店 90.5
グリム兄弟のメルヘン ハイイツ・レレケ，小沢俊夫訳 岩波書店 90.6
近松研究所紀要（創刊号） 90.6（寄贈）
昔話の時空（昔話——研究と資料——18号） 日本昔話学会編 三弥井書店 90.6

訃報

大藤時彦氏（神奈川県）平成2年5月18日ご逝去
謹んで、ご冥福をお祈り致します。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金 1,000円，年会費 4,000円。
入会申込書請求・送金先：〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所川田研究室気付 日本口承文芸学会事務局（TEL. 03-917-6111 内線 384・水曜日午前10時～午
後5時まで）振替：東京 8-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan, Prof. Junzo Kawada, Institute for the Study
of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4-51-21
Nishigahara, Kitaku, Tokyo, 114, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください